

令和3年度能代市総合教育会議 議事録

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、書面開催とした。

令和4年1月5日（水）付けで事務局から各委員に送付した案件資料等の内容に対し、令和4年3月7日（月）を期限に書面会議意見書を提出することにより開催。なお、期限内に教育長及び委員の過半数から意見書提出があったため、会議が開催されたものとする。

- 1 開催月日 令和4年3月7日（月）
- 2 場 所 書面開催
- 3 出席者 能代市長 齊藤 滋 宣
能代市教育委員会
教育長 高橋 誠 也
委 員 木村 高 寛
委 員 西村 省 一
委 員 中嶋 佐千子
委 員 寺 田 恵美子
- 4 案 件 学校・家庭・地域の連携協力の推進について
- 5 各委員からの意見
別 紙

能代市長 齊藤 滋 宣

中学校区ごとに、家庭・地域と連携した取組が浸透しつつあり、良い傾向であると考えております。学校と地域が学校運営協議会を通して、地域の課題や子どもたちの姿を共有し、協働しながら子どもたちを育ていこうとする枠組みが出来あがりつつあります。協議会の中で、地域の力が必要になった時に、学校と地域をつなぐ役割を果たす地域学校協働活動推進員も配置されており、今年度も様々な学校での教育活動において、地域の力を借りながら、その教育的効果を発揮することができていると感じております。

学校が地域から協力してもらっただけではなく、地域の要望を受けて、学校が協力する場面も見られます。自分たちの地域を活性化するために、自分たちに何ができるのかを考え、ふるさとへの愛情を育むことに寄与しております。子どもたちが社会に巣立ち、一社会人となった時に、このような体験は必ず生きて働くものと思います。コミュニティ・スクールは、子どもたちが、社会人になり、地域のために、そして地域の学校のためにという、持続可能なサイクルが確立していく仕組みであります。

一方で、学校と地域をつなぐ役割を担う地域学校協働活動推進員の確保等が課題になってきます。学校と学校運営協議会委員が連携しながら、情報を共有し、人材の育成にも力をいれていくことが必要です。

学校だけ、地域だけで子どもたちを育てるのではなく、それぞれの立場からお互いに協働して、補完しながら、子どもたちを育てていける仕組みづくり、体制づくりを整えていく必要があります。

市といたしましては、学校運営協議会制度や、地域学校協働活動推進員の配置は、有効であると考えますので、各地区の取組を参考にしながら、それぞれの中学校区の特色をいかし、学校・家庭・地域の連携について、今後も推進を図ってまいります。

能代市教育委員会

教育長 高橋 誠也

市内の全ての学校に学校運営協議会が設置され、2年目となりました。今年度からは、新たに地域学校協働活動推進員が配置されました。少子化が進み教員数も減っていくなか、学校・家庭・地域が、協働して子どもたちを育てていくための持続可能な組織づくりが、コミュニティ・スクールになります。

学校では、毎年のように人事異動があり、メンバーが入れ替わります。ある先生がいた頃には地域との連携もうまくいっていたが、その先生が異動した途端に連携が凶られなくなってしまったなどということがないように、しっかりとした組織づくりを進めていく必要があります。

学校運営協議会制度は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づいたものです。全国的にみてもコミュニティ・スクールは広がりを見せています。本市においては、地域学校協働活動推進員が学校運営協議会と連携しながら学校の要望に応じて、学校と地域をつなぐコーディネーターとしての役割を果たしています。能代第一中学校では、昨年度中止とした一中若について、地域・家庭の理解と協力を得ながら無事に運行することができました。運行の際には淳城西小学校の6年生も加わり、小・中で連携した取組となりました。第五小学校・能代東中学校では、県の地域連携安全・安心推進事業を活用して、地域とともに考える防災教育を推進してきました。自治会長と備蓄庫を合同で点検したり、減災の研修会を受けたりしたりしています。子どもたちも家庭に戻れば地域の一員です。地域一丸となって防災や減災に取り組みました。二ツ井小学校・二ツ井中学校は、地元の企業とタイアップして模擬会社「きみまちカンパニー」を設立し、生徒会長を社長に据え地域創生に取り組みました。10月30日には、商店会通りを歩行者天国にして、きみまちカンパニーフェスティバルを開催し、街の活性化に貢献しました。

この他の学校においても、地域の実情に合わせて地域の歴史を調べたり、伝統芸能を学んだり活動をしています。

これまでのように学校が何かをしてもらうだけではなく、学校が地域のために何ができるかを考え、自分たちのできる範囲で地域貢献しながら、学校も地域も双方にとってプラスとなるような取組を協働で創り上げていくことが大切であり、そのためにコミュニティ・スクールの機能がいかされていくことになります。

各小・中学校での取組例を市内で共有しながら、それぞれの地域の実態に合った形で、今後もコミュニティ・スクールとしての活動を推進していきたくと考えております。

能代市教育委員会

委員 木村 高 寛

「能代市教育等の振興に関する施策の大綱」の基本理念に「感謝と思いやりにあふれる“わ”のまち能代を目指します。この感謝と思いやりは、人と人との関わりから、また自分を取り巻く環境から、様々なことを学ぶ中で育まれていくものと考えます。・・(中略)・・お互いの立場や考え方を尊重し合い、助け合いながら、共に希望をもって生き、次代に引き継いでいくことができるよう。・・(中略)・・家庭・学校・地域・行政が一体となって育てていく取組を進めます。」とあります。

家庭・学校・地域・行政を切り結ぶものは何か。家庭・学校・地域・行政とそれぞれの立ち位置は異なっている、思い(心)はもともと一つの根「感謝と思いやりにあふれる“わ”」から生まれます。

その思いをSDGsの理念や具体的な取り組みを教育に照らして考えたいと思います。また「誰一人取り残さない社会の実現」を目指すSDGsは、単に社会活動としてではなく「豊かな人間性を育む学校教育の実践」として、大きな意味をもつのです。

私たちがSDGsへの理解を深めていく上において、少なくとも2つの重要なポイントがあると考えます。

1つ目は「私ができる等身大の実践」が伴うことです。大企業や行政の取り組みだけでは解決できない問題が山積する中、一人ひとりの日々の生活を見直すことが世界を変える大きな力となります。そのためには、例えば「ペットボトルの消費量を減らすには」「食品ロスを減らすには」など、日常の中にある具体的な課題に気づき、行動を変えていくための「アクションプラン」の作成が効果的です。人は誰でも、他人に指示され、押し付けられたりすることには消極的で、実践や継続は難しいものです。学校(生徒)・家庭(保護者)・地域(市民)が一緒になって主体的なアイデアを出し合えるようなワークショップ(体験学習)の進め方が大切です。

2つ目のポイントは、SDGsをカギとして「生きる意味」や「働く意義」を再確認することです。人は何のために生きるのか、何を「生きがいとし安心」と捉え、位置づけるのかという、教育が果たすべき役割である本質的な問いへの答えが、SDGsへの取り組みから見えてきます。

世界を見渡しても、また過去を振り返っても、多くの日本人は豊かで贅沢な暮らしを享受しているといえるでしょう。しかし、物質的な豊かさを欲望のままに消費することで、結果として多くの国の子どもたちの、食料や教育の機会を奪ってしまっていることは事実です。また排出される汚染物質、再生不可能なエネルギーの抑制のない利用は、未来の子どもたちの生活を脅かすことに繋がります。

今ここに暮らす自分や、身近な家族や仲間だけが豊かであれば幸せなのか、それとも多くの人びとの苦しみを自分の悲しみとし、その安らぎを自らの喜びとする生き方に、自分の幸せを見いだすのか。これはSDGsが私たちに、「あなたは人間としてどのように生きたいのですか」と問いかけているように思うのです。

人はどう生きるべきか、どう生きることが幸せなのかという問いの答えを、学校・家庭・地域の連携協力の推進に照らして共有できればと思います。

合掌

能代市教育委員会

委員 西村省一

学校・家庭・地域の連携については、数十年前、子どもが小学生の頃のPTA活動でも度々研修会などで話合ってきました。「三つ子の魂百まで」と言われますように、大きくなってからではしつけ等遅すぎるので、やはり大事なのは小さいとき家庭での教育、そして、子育てしながら保護者も学ぶと言うことで「PTA活動、学校と連携して頑張りましょう」になりました。当時はあまり深く考えてなかったように感じています。しかし、資料にもありますように現在は、学校で抱える課題が確かに複雑化・多様化しており、当市の不登校問題も、学校だけでは対応しきれないことを、重く受け止めています。

子どもたちの未来は、少子高齢化・グローバル化・情報化などの変化のスピードが、本当に速く・大きく、私にはどのようなようになるのか想像もつきませんが、「能代市の教育」にもありますように、学校・家庭・地域・行政が一体となった「次世代の子どもを育むまちづくり」はますます重要な位置づけになってくると思います。まさしく子どもたちは「自ら学び、自ら考え、自ら行動する力」を必要としています。

コミュニティ・スクール（学校運営協議会）導入は学校と地域が一体となることを組織化した第一歩だと思いますが、地域学校協働活動については、これまでも、それぞれの学校で地域と一体となった活動を行っています。それは、ふるさと学習交流会でもよくあらわれています。また、第五小学校での納豆作りでは、子どもたちが畑で大豆の種まき・観察・収穫をし、収穫された大豆を子どもたちが納豆にして、家庭に持ち帰り「この納豆ぜんぜん粘らないなあ」とか、楽しく会話をしながら家族と一緒に食べる。この流れは、学校（第五小学校）と地域（農業法人アグリ檜山、檜山納豆）・家庭（家族）・行政（農業振興課）が連携・協働したものです。このようなことが土台になって「地域とともにある学校づくり」に繋がっていくと考えております。

また、地域学校協働活動推進員のみなさんが重要な役割になるのではないのでしょうか？学校と地域をつなぐ、細かいところまで調整役として奔走していただけるような、足腰の強い推進員が必要です。協働活動のために先生方が時間を取られ負担にならないと思います。

冒頭でPTAにふれましたが、学校と一番身近な存在はやはり保護者です。保護者は地域の人でもありますし、地域の企業人でもあります。PTAでも是非活躍していただきたいものです。（今のPTA活動は元気でしょうか）

能代市教育委員会

委員 中 嶋 佐千子

今を生きる子どもたちは、様々な事情を抱える子が少なくありません。

学校だけで抱える課題が複雑化・多様化しているため社会全体で「子どもの育ち」を支えることが大切だと考えられています。

また、小規模校の閉校・地域から学校が無くなっている状況ですが、地域の伝統は子どもたちに継承される必要があると思います。

その為にもコミュニティースクールは地域と学校をつなぐ重要な役割を担うと考えます。

地域の人々が地域の子どもの一緒に支え育てていると言う意識を持つためにも、学校と地域をつなぐ地域学校協働活動推進員の役割が重要です。

私の地元の二ツ井小学校と二ツ井中学校では「地域創生事業きみまちカンパニー」として地域と連携しながら、商店街を歩行者天国にして児童・生徒が考えた商品を販売して大勢の集客があったと聞いていますし、日ごろから小学生が商店街の宣伝ポスターを作製して、訪れたお客さんを和ませてくれています。

また児童の通学でも、横断歩道手前で車を停止すると、渡り切った子どもたちは振り返り一礼をして進んで行きます。この子どもたちのお礼は、とても心地よく当たり前交通ルールを守っている大人の気持ちを和ませてくれます。

今後一層社会全体でのサポートが必要なため、地域の方々の学校と子どもたちへ協力をお願いしたいと思います。

能代市教育委員会

委員 寺田 恵美子

コミュニティスクールについてのご説明、能代市の実践事例のご紹介を、ご丁寧にありがとうございました。

能代市のコミュニティスクールの取り組みは、大変素晴らしいと思います。

コミュニティスクールが導入される以前から、学校と家庭、地域の連携が図られていたこと、コミュニティスクールの考えがしっかりと根付いていることがわかります。

この度、ご紹介いただきました2校は、コロナ禍にありながらも感染予防対策にも努められ、十分なコミュニティが確立されていること、児童・生徒の考えに周囲の大人がきちんと耳を傾け、尊重し、一緒にプロジェクトに取り組んでいることが特に素晴らしいなあと思いました。

私も中3の息子がおりますが、近年は学校を訪れることも、生徒と直接関わることも制限されており、とても寂しく感じておりました。ですが、前述の2校から、コロナの正しい知識と感染予防対策をしっかりと行うことにより連携体制が確立できることや生徒と直接関わること以外にも学校に求められる家庭や地域の協力・理解のあり方があることを学びました。

この度の案件「学校・家庭・地域の連携協力の推進」ですが、平成30年3月に示された「能代市教育等の振興に関する施策の大綱」の基本目標1【施策の方向性】①に挙げられています。策定に向けた総合教育会議の議事録を拝見しました。齊藤市長はじめ策定に携わられました教育委員の皆様の想いや願いを知りました。

策定から4年が経ちますが、この間、小規模校の統合により、学区域が広がったことで、学校と地域とのつながりの希薄化に拍車がかかったように感じます。また、宅地開発により、子育て世帯の移住によって、児童・生徒数の確保はできているものの、親子2代もしくは3代、4代に渡る「おらほ（我）の学校」という考え・想いの家庭・地域の方々は減少しているように感じます。

能代市が掲げる「みんなでつくる わのまち 能代 能代市民の 和 環境で活力を生み出す 環 未来へつながる 輪」に加えて、我（私、自分）のまちという意識を高めていきたいと考えます。ふるさと能代に誇りと愛着そして責任がもてる人を育てる教育が求められると思います。とは申しましても、意識改革はとても難しい課題であると思います。

それでも、根気強く、市民の皆様にも能代市が目指す教育を…学校…を理解していただくことは続けていく必要があると思います。

そのためにも、コミュニティスクールが大事なのだと思いました。

学校は児童・生徒の学ぶ場であり、その学びを保障されることが大前提ですが、保護者はもちろん地域の皆様にも開かれた学校であってほしいと思います。以前、向能代小学校や東雲中学校が実践されていた「みんなの登校日」（その日は、保護者や地域の方々が一日のどの時間でも登校でき、授業を参観したり、実際一緒に授業を受けたりできる）のような機会があれば、空き時間や好きな時間（興味・関心のある授業）に訪れることができますし、来校時間も分散されることで密を避けられると考えます。

さらには、保護者や地域の方々が興味・関心を示すような新しい学習内容（プログラ

ミング学習やICT・タブレットを使った授業、小学校の英語の授業など)を参観していただくことで、今、能代の子どもたちが何を学んでいるのか、能代市が子どもたちをどのように育てたいと考えているかなど、少しずつでも理解を頂くことにつながるのではないかと考えます。

そうしますと、現場の先生方のご負担も大きくなってしまいかもかもしれませんが…そこで、学校運営協議会の方々や地域学校協働推進員の方のお力やサポートが効率よく機能してくださることを期待しています。

「百聞は一見に如かず」どんなに詳細な情報の発信よりも、実際に、学校を訪れ、子どもたちを見ていただくことが有効であると考えます。

そして、能代市の教育への理解を示していただき、教育活動を支えていただきたいのは、能代市の企業の代表・トップに立つ皆様です。学齢期の子どもをもつ保護者が、子どものための時間をつくりやすい職場環境を今一度考えていただきたいと思います。単に、病気や怪我などのための養護の時間を保障するだけでなく、学校行事や授業の参観・PTA活動などのための時間も保障していただきたいと考えます。

そのためには、そうした代表の方々へも、能代市の教育についてご理解いただく場・機会をもち、しっかりと丁寧に説明することが必要であると考えます。

ですが、企業の中には経営が厳しく、従業員の生活を保障することで精一杯という企業もあります。

そうした事情を踏まえ、教育活動に理解や協力をしてくださる企業には、能代市からの支援や特典があると協力体制が広がり、強化できると考えます。

これまでも、ICT教育に必要な大型電子黒板やコロナ禍に児童・生徒にマスクなど、その時々状況に応じて、即座に寄贈して下さるの方々のご好意・お気持ちはずっと大切にしなければならぬと思いました。

また、能代市内の全ての学校が同日に行事(特に卒業式や入学式・学校祭など)をもちますと、同じ職場内では時間が取りづらい・業務が滞るなどがあり、企業側にも従業員側にも従業員同士にも遠慮が生じます。

企業側の職場環境の見直しは、日頃からきちんと従業員一人ひとりへの生活環境を把握し、理解を示すことの重要性を再認識することにもつながると思います。

能代市の子どもたちを能代市民みんなで育てていくという考えからすれば、行事の日程も各校の実情に合わせてまた、市内の各校間の情報交換・情報共有を行い、ひとりでも多くの保護者が、学校を訪れることができる日を設定できるようにすることも大事であると考えます。

最後に、私は、小学生の「ふるさと学習交流会」、中学生の「能代っ子ふるさと会議」にご一緒させて頂けることが大好きでした。

子どもたちの感性の豊かさ、着眼点の鋭さ、そして、プレゼンテーション・発表のスキルの高さ…本当に素晴らしいと思います。

大人の私たちが、能代市の魅力を再発見したり、逆に教えてもらえたり、とても、有意義な時間でした。

コミュニティスクールもいかに持続・継続していくか…が課題であるとされていますが、「交流会」や「ふるさと会議」を是非、可能なかぎり、続けていただき、コミュニティスクールとしての各校の取り組みなどもそのような場で、多くの人に紹介していただきたいと思いました。